

2. 大学院学生自習室での受け入れた紀要の整理をすすめる。

## 9.5.2 研究活動

### 【評価項目 9-2-1】 研究活動

- (必須要素) 論文等研究成果の発表状況
- (選択要素) 国内外の学会での活動状況
- (選択要素) 当該大学院・研究科として特筆すべき研究分野での研究活動状況
- (選択要素) 研究助成を得て行われる研究プログラムの展開状況

### 【評価項目 9-2-2】 研究における国際連携

- (選択要素) 国際的な共同研究への参加状況
- (選択要素) 海外研究拠点の配置状況

#### <2003年度に設定した目標>

1. 「言語科学」「言語文化」「言語教育」の3つの領域に関する研究を深化させ、それらに関する研究論文・研究成果を発表していく。
2. 国内外の学会での活動をさらに促進する。

#### (現状の説明)

1. 教員は、「言語科学」「言語文化」「言語教育」の3つの領域において、活発な研究活動を行っている。2004年度については、5名の教員が科学研究費補助金を得て、それぞれの専攻分野に関する研究を行っている。大学院学生の学会発表数と論文発表数は、それぞれ2002年度22件、1件、2003年度20件、11件、2004年度24件、5件となっている。
2. 各教員の研究成果は、学会での発表、講演、紀要や学会誌への論文掲載、著書などの形で、活発に外部に公表している。学会での役員も多く、2004年度現在、全国的学会の会長1名、副会長1名、支部長2名、副支部長1名、学会理事10名である。最近の学会賞の受賞者は以下の通りである。

八木克正教授 (1999年) 英語語法文法学会賞『英語の文法と語法—意味からのアプローチ』(研究社)

門田修平教授 (2002年) 大学英語教育学会賞『英語の書きことばと話しことばはいかに関係しているか—第二言語理解の認知メカニズム—』(くろしお出版)

田村和彦教授 (2004年) 日本独文学会賞『魔法の山に登る—トーマス・マンと身体』(関西学院大学出版会)

また、研究書の出版も積極的に行われている。主なものを以下に挙げる。

#### 2001年度

紺田千登史教授『フランス哲学と現実感覚—そのボン・サンス系譜をたどる』(関西学院大学出版会)

山本雅代教授 Language Use in Interlingual Families :A Japanese-English Sociolinguistic Study. Multilingual Matters Ltd.

2002年度

大日向幻教授『イギリス風刺詩』（関西学院大学出版会）

門田修平教授『英語の書きことばと話しことばはいかに関係しているか  
－第二言語理解の認知メカニズム－』（くろしお出版）

丹治恆次郎教授『最後のゴーガン<異国>の変貌』（みすず書房）

2003年度

門田修平教授（編著）『英語のメンタルレキシコン－語彙の獲得・処理・学習－』  
（松柏社）

春名純人教授『『ハイデルベルグ信仰問答』講義』（聖恵授産所出版部）

2004年度

門田修平教授（共著）『英語シャドーイング』（コスモピア）

河村克俊教授（共編著）『近代からの問いかけ－啓蒙と理性批判－』（晃洋書房）

関谷一彦助教授・山上浩嗣助教授（共編著）『はじめて学ぶフランス』（関西学院  
大学出版会）

関谷一彦助教授 Lire Sade, 《La lecture de Sade au Japon : la question  
de l'obscentite dans le proc es Shibusawa/Ishii (1961) 》  
（L'Harmattan）

3. 研究科間の国際連携は現在行われていない。現在は、各教員が個別にそれぞれの研究分野で国際共同研究を行っている。

（点検・評価の結果）

1. 「言語科学」「言語文化」「言語教育」の3つの領域に関して、教員による活発な研究が行われており、それらに関する研究論文・研究成果が発表されている。大学院学生の論文の紀要等への発表数は十分でない。
2. 国内での学会活動は十分に行われているが、海外での学会活動は一部の教員に限られている。
3. 研究における国際連携については十分ではない。

（改善の具体的方策）

1. 指導教員等から大学院学生の論文の紀要等への投稿を奨励する。
2. 国内での学会活動は十分に行われているが、今後は海外での学会活動にも力を注ぐ必要があり、そのためにも研究科間における国際連携について検討していく。